

オルタナティブな地域活性の形としての「アナーキーなまちづくり」の理念

早川公 (大阪国際大学)

Keyword : アナーキズム、まちづくり、文化人類学、D. グレーバー、共創、TAZ

【問題・目的・背景】

今日の世界を覆う COVID-19 の混乱のなかで、文化人類学者でありアナーキストのデヴィッド・グレーバーは、「魔神は瓶に戻せない」という挑発的な発言で今後の社会のあり様についてインタビューで見解を述べたⁱ。そこでグレーバーは、経済とは「わたしたちが互いをケアするための方法、わたしたちが互いの生存を支えていくための方法」ⁱⁱとして理解する必要性を主張する。それは、長く続く「経済」の停滞の中で、有効な手立てを講じることができないまま人口過減少社会に突入した日本社会の地域活性を考えるうえで、改めて胸に刻むべき内容である。

地域活性を指す概念としてのまちづくりは、戦後日本の地域開発への対抗運動として誕生した概念である。その後まちづくりは都市計画から福祉政策、地方自治、中心市街地活性化、コミュニティ振興といった広範な領域を指す概念となった。またそれを対象とする研究も、建築学や社会工学、政策科学・行政学、社会学等複数の学問領域が担ってきた。「わが国の重要な社会課題、政策課題である地域活性化をアカデミズムの立場から支援する」ⁱⁱⁱことを目的とする地域活性学会もまた、この流れのなかで学際性を意識して設立されたものであろう。さらに 2014 年からは「地方創生」の名のもと、人口減少対策を中心とした地域活性の形に多くの関心と税金が向けられている。しかし、この 5 年の成果は乏しいものと言わざるを得ない。それは、来るべき社会に向けてより適切な想像力の枠組みを提供してこなかった学問の問題でもある。以下で紹介するように、持続可能な社会の実現のためには、国家と市場のどちらにも囚われすぎずに生活を編むための実践理論が必要とされる。

そこで本発表は、国家や市場とは別の仕方でもち/地域をつくり出そうとする試みを「アナーキーなまちづくり」と名づけることから議論を始めることにしたい。すなわち、「アナーキーなまちづくり」とは、「相互性と自立性を基盤として管理や標準化に抵抗しながら生活空間を改編するプロジェクト」[早川 2020:88]のことを指す。それでは、その「アナーキーなまちづくり」はどのような理論的背景をもち、具体的な様態としてどのような可能性が考えられるのであろうか。本発表は、その検討を通じてこれからのまちづくり/地域づくりのありようについて考える。

【研究方法・研究内容】

この「アナーキーなまちづくり」をオルタナティブな地域活性の形として輪郭を整えていくために、本発表では、先に挙げたデヴィッド・グレーバーを中心としつつ、ハキム・ベイの議論を参照する。そして、それらが既存のまちづくり/地域づくりの議論とどのように異なるのかを示しながら、「アナーキーなまちづくり」の理念とその小領域(エンクレーヴ)[cf. ベイ 2019]について言及する。

【研究・調査・分析結果】

グレーバーは、アナーキズムについて次のように説明する。

アナーキズムは、それ自体、大変古いものであるとはいえ、結局は「理念 (idea)」なのである。それは同時に、「古い社会の殻の内側で」新しい社会の諸制度を創造しはじめるという「企画(プロジェクト)」である [グレーバー 2006:42]。

ここからグレーバーは、社会経済生活を人間本性観に位置付けて議論してきた文化人類学の蓄積を参照しながら、アナーキズムの根幹をなす「各人はその能力に応じて [貢献し]、各人にはその必要に応じて [与えられる]」[グレーバー 2016:142]という(基盤的)コミュニズムの原理を見出す。このコミュニズムは、互酬性という感覚に基づくもので、交換とヒエラルキーという異なるモラルの原理と関係づけて語られる。なお、ここでいう交換とは等価性に基礎づけられたやりとりのプロセスであり、代表的なものが非人格的な取引を理念とする商業的交換である。一方ヒエラルキーとは、互酬性とは正反対の原則にしたがって機能し、優劣の線を引いて上下関係を作り出すものとして説明される [ibid:166]。すなわち、この規則や取り決めの外側で、即興的で協働的に振る舞う人間の実践(すなわち共創)こそが、既存の社会制度が危機に瀕している今日において、不確定な状況でやりくりしようとする人間の可能性を再想像する足場として重要なことをグレーバーは指摘するのである。

このような観点からまちづくりを眺めたとき、既存の研究はそれとは別のところを志向していたように見受けられる。現今のまちづくり研究は「成功事例」の要因を定量的に考察することで妥当性を担保しようとする。そしてそれが「ベスト・プラクティス」という規範的な基準となつて標準化され、政策や各種取組みに反映される。しかし上述したように、管理や支配にさりげなく抵抗する日常実践にこそ社会変革の可能性が胚胎しているというアナーキズムの観点に寄り添うならば、それを再検討する重要性は大きい。

【考察・今後の展開】

グレーバーが指摘するように、アナーキズムは共生(コンヴィヴィアリティ)のための足掛かりとなる[cf. グレーバー2017]。「アナキーなまちづくり」は、それを具体的なプロセスを通じて取り戻していくプロジェクトであり、その具体的な実践の様態を書き留めることは、これまでとは別の仕方の社会を想像しなければならぬ今日の地域活性の重要な展開として位置づけられる必要がある。

それでは、今後の展開として、我々は「アナキーなまちづくり」を具体的にどこに見出していけばいいのであろうか。グレーバーに先駆けて、1980年代よりアナーキズム的な活動を展開するハキム・ベイ(ピーター・ランボーン・ウィルソン)は、アナキー的な実践を可能とする空間/時間の領域を「TAZ(Temporary Autonomous Zone: 一時的自律ゾーン)」と呼んだ。ベイの記述に従えば、それは不可視であり名付けられるや否や消滅しなければならないものとのことであるが[ベイ 2019:197]、一方でそれは政治的ドグマではなく日常生活に溶け込む自明のものであるとも述べている。今後、「アナキーなまちづくり」を検討していくためには、この不可視をつくり出す方法(modus operandi)の解明を試みる必要がある。

ベイはまた、「ガーデニング」の可能性に着目する論述で以下のように述べる。

近い未来に現れつつあるラディカルな文化は猟師、採集家、庭園家、そして資本による単純な収用や放置によって特徴づけられた「排除領域」における自由農民た

ちの価値や経験に注目するだろう。(中略)おそらく、それは世界のいたるところで資本に抵抗しようと欲望する人々に感染するのだ[ベイ 2006:125]。

我々はここから、オルタナティブな地域活性の形を「排除領域」に注目することを通じて「発見」していくことが求められる。例えばそれはベイが着目するように農業(ガーデニング)、あるいはグレーバーが可能性を見出す(コンピューターエンジニアが代表的)起業家、さらには人間にとって本質的な行為である「歩くこと」や「移動」といった小領域(エンクレーヴ)を可能性として指摘できる。本発表では、その具体的な小領域に分け入ることはできなかったが、今後は定性的な調査を通じて明らかにしていきたいと考えている。

【謝辞】

本発表は、公益財団法人サントリー文化財団研究助成「学問の未来を拓く」の助成を受けて開始することができた。この場を借りてお礼申し上げる。

【引用・参考文献】

- ・ ベイ、H.(ピーター・ランボーン・ウィルソン)(2006)「アヴァン・ガーデニング」金田智之訳、『VOL』01:114-125
- ・ — (2019)『T. A. Z. 一時的自律ゾーン、存在論的アナキー、詩的テロリズム 第2版』箕輪裕記、インパクト出版会。
- ・ グレーバー、D.(2006)『アナキスト人類学のための断章』高祖岩三郎訳、以文社。
- ・ — (2016)『負債論』酒井隆史監訳、高祖岩三郎・佐々木夏子訳、以文社。
- ・ — (2017)『官僚制のユートピア テクノロジー、構造的愚かさ、リベラリズムの鉄則』酒井隆史訳、以文社。
- ・ 早川公(2020)「まちとシステムとわたし —— 「アナキーなまちづくり」の理念構築に向けて」『共生科学』11:80-89。

i 片岡大右(2020)「「魔神は瓶に戻せない」D・グレーバー、コロナ禍を語る/片岡大右」
<http://www.ibunsha.co.jp/contents/kataoka03/>
(2020/7/10 参照)

ii 同上。

iii 地域活性学会「設立趣意書」<https://www.chiiki-kassei.com/pb/cont/outline/22> (2020/8/1 参照)